

早慶ライブラリーブックシェア -相互資料取寄せの更なる強化-

とも の し ほ
友野 詩穂

(三田メディアセンター主任)

もりおか ゆうすけ
森岡 祐介

(メディアセンター本部)

1 はじめにーサービスの背景と概要

2019年9月、慶應義塾大学メディアセンター（以下「慶應」とする）は早稲田大学図書館（以下「早稲田」とする）と図書館システム Alma/PrimoVE¹⁾ の共同運用を開始した。それまでは両校の蔵書を別々に検索する必要があったが、このシステム共同運用によって一元的に検索できるようになった。その際「自校の資料だけでなく相手校の資料も予約・取寄せや館外貸出ができる」機能の実装は見送られていたが、この時すでに、“このシステムを利用することによって実現された1,000万冊を超える所蔵を誇るバーチャル図書館が両大学の利用者によって活発に利用される”²⁾ という、より進んだ将来像が描かれていた。

こうした背景から、両校の間で2022年頃に相互利用拡大に向けた検討が開始され、2023年度に運用実施案や機能の検証を進めた。それぞれでシステム設定を変更して検証する中で、新たな問題に直面する

こともあったが、両校のスタッフ間で情報共有や連携を密にして協力しつつ、試行錯誤しながら打開した。サービス内容を検討する上で目指したのは以下の点である。

- ◆Alma/PrimoVEの機能を使って、両校の資料へのアクセスを容易にすること
 - KOSMOS/WINE³⁾ から互いの図書館の利用登録ができること
 - KOSMOS/WINEから互いの図書館所蔵資料の取寄せ（所属館での受取り）ができること
 - カウンターでお互いの図書館所蔵資料を貸出できること

最終的にこれらの点を実現したサービス「早慶ライブラリーブックシェア」（以下「本サービス」とする）を、2024年4月に両校の常勤教職員・名誉教授を対象として開始した。その後、2024年11月にサービス対象を両校の大学院生へ拡大した。表1に本サービスの概要を示す。

表1 早慶ライブラリーブックシェアの概要

	早稲田所属者	慶應所属者
来館貸出可能館	三田・日吉・理工学・湘南藤沢	中央・戸山・理工学・所沢・理工学生読書室
取寄せの対象資料	三田・日吉・理工学・湘南藤沢・薬学の各メディアセンターの一般図書	中央・高田・戸山・理工学・所沢・理工学生読書室の各図書館の貸出可能資料
取り寄せた相手館資料の受取可能館	早稲田：中央・高田・戸山・理工学・所沢 慶應：三田・日吉・理工学・信濃町・湘南藤沢	慶應：三田・日吉・理工学・信濃町・湘南藤沢・薬学 早稲田：中央・戸山・理工学・所沢
返却可能館	早稲田：中央・高田・戸山・理工学・所沢 慶應：三田・日吉・理工学・信濃町・湘南藤沢	慶應：三田・日吉・理工学・信濃町・湘南藤沢・薬学 早稲田：中央・戸山・理工学・所沢
貸出期間・更新最大期間	貸出期間：14日間 更新最大期間：90日間	貸出期間：14日間 更新最大期間：42日間
貸出冊数	5冊まで	
取寄せ冊数	5冊まで	

2 早慶ライブラリーブックシェアの取り組み

本サービスの取り組みを運用とシステムの2面から述べる。

(1) 運用面について

導入にあたり、運用プラン（サービス対象身分、貸出冊数制限等）やサービス開始のスケジュールを両校の担当者で検討した。対象身分は「まずは常勤教職員・名誉教授、次に大学院生と段階的に進めていくのか」「常勤教職員・名誉教授と大学院生を同時に開始するのか」が論点となった。後者の方がインパクトは大きいですが、スタッフの負荷や利用状況を注視しながら運用調整ができるという理由から、前者を採用することとし、対象身分のサービス開始時期を策定した。

a 取寄せによる貸出（Direct requesting機能）

国内の大学図書館コンソーシアムの事例を確認したところ、いずれも他大学図書館の蔵書を借りるための利用券作成や所蔵館への直接訪問が必要であり、資料の取寄せには別途申込みをしなくてはならない。一方、本サービスでは相手校の資料を自校の検索システムからリクエストし、自校の図書館へ取寄せて借りられるという、あたかも自校の資料であるかのように相手校の資料を取寄せて借りることができる。これは本サービス独自の強みである。

本サービスに先立ち、新型コロナウイルス感染症が流行した2021年3月～2024年3月には非来館による利用者登録と資料の取寄せ貸出の臨時サービスを実施していた。その際は、両校スタッフ間でのメール連絡による利用者登録や、NACSIS-ILLでスタッフの手を介して資料取寄せ処理を行っていた。この対応は従来の枠組みのなかでのサービス拡大であり作業コストはかかっていたが、本サービス導入の下地となる取り組みであった。本サービス導入後は利用者登録・資料取寄せともに利用者自身がそれぞれKOSMOS/WINEから行えるようになり、大幅な事務処理の効率化が実現した。

また、日々両校間を行き来し、資料を定期的に巡回し配送する「早慶便」についても調整を行った。従来の図書館間貸借とは異なる専用の宛名札、ビニールバッグ、コンテナを用意して担当者が判別しやすいように配慮した。また、慶應内のコンテナの集配場所を従来のものと分けることで、物流の増加に対応するとともに、資料の発送・到着処理の作業効率も向上した。現在、早慶便は早稲田の中央図書

館と慶應の三田メディアセンター間で運行しているが、今後さらに物量が増えた場合には他キャンパスへの巡回も検討することになるかもしれない。

なお、KOSMOSの検索範囲のデフォルト設定も検討対象となっていた。現在は「所蔵資料と電子資料」の検索がデフォルトとなっているが、自校に所蔵しているタイトルしか相手校の所蔵は表示されない。利用者が「相手校のみ所蔵」の資料も発見できるよう両校の所蔵を検索する「所蔵資料と電子資料（早慶）」をデフォルト表示させることも検討されたが、両校の契約電子資料の表示調整が困難なことから、2025年8月時点では見送りとなっている。

b 来館による貸出（Walk-in loans機能）

これまでの相互利用では、両校の常勤教職員と名誉教授は相手校に出向いて利用登録を行うことで貸出券が発行され相手校の資料を借りることができた。そのため、「取寄せによる貸出（Direct requesting機能）」ではなく、まずは従来のサービスに近い「来館による貸出（Walk-in loans機能）」から検討を始めた。システム設定を調整し無事に両校の利用者データを参照できた瞬間は、本サービス実現に一步近づいた場面として強く印象に残っている。

なお、WINEで利用登録せずに慶應に来館し、その場で貸出を希望する早稲田所属者もいる。そのため、WINEにアクセスして利用登録ボタンが表示されるQRコードを早稲田所属者用のICカードリーダーに貼付し、早稲田所属者のスマートフォンで読み取れば登録できるようにした。「取寄せによる貸出」の実現によって利便性は飛躍的に向上したが、「来館による貸出」にも対応したことで、両校の所蔵資料をブラウジングした後、そのまま欲しい資料を借り出せる機会も確保されている。

本サービスの開始にあたり、慶應内では各メディアセンターの閲覧業務担当の代表者を募り、半日間の講習会を行った。参加できなかったスタッフには録画の配信も行った。検証に携わったスタッフは、通常の業務と並行して前述の講習会や業務マニュアルの改訂、委託スタッフへの説明等の準備を進めたため負担も大きかった。しかし、普段はなかなか知ることのできない他大学の閲覧業務について、忌憚なく意見を交換できるまたとない経験になった。

(2) システム面について

早慶の担当者とEx Libris社のAlma製品サポート

の三者で連携し、2022年2月に両校のテスト環境を連結させて検証をスタートさせた。

a 利用者データ連携

まずは利用者データの連携について検証を行った。相手校に共有されるデータ項目は、サービスを提供する上で必要最低限の項目になるよう、両校の担当者が協議して設定した。また、一部データ項目は両校で利用方法が異なるものもあり、相手校の運用の理解も必要であった。

b 貸出ルール設定と動作検証

取寄せ・貸出の動作検証のため、まずはテスト環境に本サービス用の貸出ルールを別途作成し、両校で共通化したルールを設定することから始めた。取寄せや罰則など両校の間には様々な違いがあって時間を要したが「貸出期間」「罰則」「冊数制限」「受取館」など可能な範囲で共通化したルールを作成し、2022年8月頃から連携した動作検証を開始した。

当初、共同運用開始時から利用していたプロジェクト管理ツール上でやり取りをしながら、必要に応じて相手校に操作を依頼する流れで検証を行った。しかし、両校でそれぞれのAlma/PrimoVEでの操作が必要な場合が多く、上記の方法は効率的とは言えなかった。

そこで、両校の担当者でまとまった時間を取って合同で作業する検証会を開催することにした。それまで閲覧・貸出業務を担当するFulfillmentチームが中心となって検証を行っていたが、この検証会ではディスカバリーサービスを担当するDiscoveryチーム、図書館システム全体の運用を担当するシステムチームを加えた3チームのメンバーで新たに検証チームを編成し、より幅広い目線で検証・評価を行えるようにした。検証会では会議室に複数のPC・モニタを準備して両校のAlma/PrimoVEを同時に確認できるようにすることで、一連の流れを把握しやすいようにした。

事前準備として、実施する検証項目を挙げた上で、各検証で使用するテストデータの準備を行った。このテストデータの準備は、利用者データの有効期限や貸出冊数、返却日など、想定しなければならない条件が多く、想像以上に労力を要した。しかし、これにより詳細な検証を行うことができシステムの理解も進んだ。

検証会は2023年7～8月の間に4回行われ、運用

に必要な機能は問題なく動作することを確認し、各チームリーダーへの報告が行われた。さらに、本サービス開始直前の2024年2月と、大学院生へのサービス拡大直前の2024年10月に、検証チームでリリース前の最終検証が行われた。今後サービス対象の拡大等が行われる場合は、同様の検証・確認が行われるだろう。

c 教職員ユーザグループの分割

本サービスの対象者は常勤教職員・名誉教授・大学院生に限られている。サービス開始以前、慶應の利用者マスタファイル上では常勤教職員・非常勤教職員を区別なく「教職員」グループとして扱っていたが、このタイミングで、本サービスの対象である「教職員W」と対象外である「教職員」に分割することとなった。

運用中のユーザグループの分割はシステム運用開始から実績がなかったため、分割方法を慎重に検討した。その結果、教職員用の貸出ルールが「教職員W」「教職員」両方に適用されるよう調整し、その後、利用者データ登録で利用しているツールの改修や既存の利用者データの分割作業を行うこととした。この作業は本サービス開始の約3か月前に行われ、特に大きな問題なく終えることができた。

d 利用者向けメール等の調整

利用者向けメール（資料到着、返却期限日のお知らせ等）のフォーマットを両校で統一することも検討した。しかし、前述のとおり利用方法の異なるデータ項目が存在するため、作業に多くの工数がかかることが想定され、自校の貸出サービスにも影響を与えることから統一は見送られた。

業務で利用する帳票やAlmaの機能を補うために開発した独自システムも、あまり工数をかけず必要最低限の改修のみを行うこととした。それまでの帳票や独自システムから大きく変更がないという意味では、本サービスの開始に伴うスタッフへの負担を最低限にすることができたと考えられる。

e 早稲田用ICカードリーダーの導入

来館による貸出に対応するためのICカードリーダーの導入が必要になった。実際に利用しているICカードリーダーと検証用ICカード（教職員証・学生証）を早稲田から借り受け、スムーズに検証を進めることができた。特に問題なく利用できたため、現在では早稲田所属者の入館を認めている慶應の各メディ

特 集 早慶ライブラリーブックシェア・早慶ライブラリーパスポート

アセンターに設置している。

f 利用登録ボタンに関する Ex Libris 社との交渉

本サービスを利用するには事前に相手校への利用登録が必要となる。慶應所属者は KOSMOS から、早稲田所属者は WINE から利用登録ボタンを押下することで登録が可能である。相手館と利用者データを連携するためには、個人情報等の取り扱いについて利用者から同意を得ることは不可欠であった。しかし、検討段階では、ボタン押下後に同意を求める画面を表示させることができなかった。

そこで、Ex Libris 社製品のユーザ・カンファレンスに早慶ともに現地で参加し、上記の問題点も含めて製品の機能改善を求めることにした。ミーティングでは Ex Libris 社の幹部と直接交渉のうえ、上記の問題点について理解を得て、サービス開始までに改善された。

(3) 貸出統計の分析

本サービスの貸出統計は月次で集計し、両校で共有している。この統計結果を分析した。

まず、早稲田所属者への貸出の多い資料を所蔵するメディアセンターを調査した。慶應には各キャンパスにメディアセンターが存在し、そのうち5つのメディアセンターで早稲田所属者への貸出を行っているが、約6割が三田メディアセンターで、約2割が日吉メディアセンター、残り2割が理工学、湘南藤沢、薬学の各メディアセンターという結果となった。これは早稲田所属者が借りることのできる資料の所蔵割合とほぼ一致しており、所蔵と利用傾向の整合性が確認された。

次に、本サービスによって貸出された資料が自校に所蔵されているかを確認した。その結果、早慶ともに4割以上は自校に所蔵がない資料の貸出であることが分かった。今後も継続的にこの数値を追っていくことで、分担収集の観点からも本サービスの有用性を評価していきたい。

3 おわりに

本サービスの短期的な展開としては、残されている課題の一つである「KOSMOS 上の利用登録ボタン表示の改善」が見込まれている。現在サービス対象外の身分にも利用登録ボタンが表示されているため、利用者にとってサービスの利用可否が分かりづらい状況となっているが、今後は対象身分に対して

のみボタンが表示されるよう PrimoVE の改善が進められている。また中長期的な展開として、本サービスの対象者が拡大すれば、慶應のメディアセンター間だけでなく早稲田とも分担収集や共同保存に関する協力の検討も視野に入るだろう。国内大学図書館の事例では山手線沿線私立大学図書館コンソーシアムが「逐次刊行物の分担収集・保存協定」を調印している⁴⁾。元来、図書館界には相互協力の理念が根付いており、早慶でも1986年4月より「早稲田大学および慶應義塾の図書館相互利用に関する協定書」を締結しサービスを提供してきたが、本サービスの開始によって更なる連携が具体的に前進したといえる。今後も早稲田との協力を継続的に進化させていきたい。

注・参考文献

- 1) Alma は Ex Libris 社のクラウド型図書館システム、PrimoVE は同社のディスカバリーサービス
- 2) 深澤良彰. 特集に寄せて 早慶図書館システム共同運用の実現を振り返って. MediaNet. 2020, no. 27, p. 5.
- 3) KOSMOS は慶應, WINE は早稲田の蔵書検索システムの名称
- 4) 牛崎進. 講演 山手線沿線私立大学図書館コンソーシアムに見る図書館連携. 私立大学図書館協会会報 = Bulletin of Japan Association of Private University Libraries. 2008, no. 129, p. 53-55.